

群馬の自然

特集 ぐんま百名山の自然X
下仁田町付近の山②

No.167

2013 冬

特定非営利活動法人 (NPO)

群馬県自然保護連盟

URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>
e-mail shizen@dan.wind.ne.jp



ヤマカガシ

季節のたより(1)

イワヒバリ

三井田 進

生息地は森林限界より上部の岩場や草原。冬季餌を求めて里山に降りてくる。



撮影 高崎市倉沢町川浦 (2012.2)

目次

表紙 ヤマガガシ	水村 聡子	1
季節のたより(1) イワヒバリ	三井田 進	2
巻頭語 自然からのメッセージ	金井賢一郎	3
特集 ぐんま百名山の自然X 下仁田付近の山②		
伝説の残る稲倉山	高野 賢一	3
荒船山と白髪岩	里見 哲夫	4
妙義山における子どもたちの自然体験活動	亀井 健一	6
行事報告		7
鈴ヶ岳清掃登山(9月16日実施)	五十嵐京子	7
赤城山キャンプ場より鈴ヶ岳	里見 哲夫	8
ワラビ平・高倉山(10月21日実施)	佐塚 直美	9
植物歳時記(60) アオキ	吉田 龍司	10
図鑑の内と外 植物私記③ ツルヨシ	佐鳥 英雄	11
群馬の地質 原発マネーを断る	飯島 静男	15
植物をミクロで見る(8) イヌホタレイ	青木 雅夫	15
残された自然の中で(159)		
チメドリ科外来種の生息状況	谷畑 藤男	16
表紙の説明・事務局日誌(167)		18
シロマダラ・事務局だより		20

巻頭言

自然からのメッセージ

理事長 金井 賢一郎

平成25年の幕開けです。おめでとうございます。会員の皆様、自然保護連盟にご理解をいただき皆様、よいお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

今年は千支でいうと「巳」^みどしです。十二支の第六です。巳は古くからの言い伝えでは「世の中そのものの災難を除き、幸福をもたらすもの」といわれています。いつものことながら今年も連盟の一層の活動を想い、世界が平和であるようお願いしています。皆様の一層のご支援をお願いいたします。

さて、グローバルな見地から自然界の変化を眺めると、相変わらず地球温暖化問題、CO₂排出削減問題は遅々とした進み方だし、当然、国際生物多様性問題も同様です。3年前に日本で開催されたこれら国際的な大きな会議にもかかわらず、現状では効果が目立たないようです。

例えば温暖化傾向ですが、日本では具体的

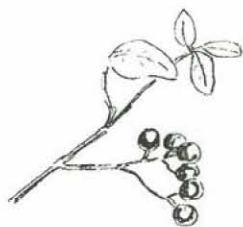
には生物種にどんな傾向が現れているのか最近の報道から拾ってみると、先日のテレビで作家の倉本聡さんが「最近の富良野の気温はマイナス20度を超えることは少なくなったが、かつてはマイナス30度はさらに超えた」と語っていました。そして「ブナの育つ範囲が北上している」とも。

本州ではイノシシの生息域の北上。セアカゴケグモや熱帯性のアギトアリの確認。渡り鳥の越冬地滞在期間の短縮、等々（朝日新聞より抜粋）。

こうしたさまざまな変化は、既に蝶やセミ、カエルなどにも現れていることは周知の事実です。今まで安定していた生態系の乱れは、人間を含め多くの生物世界のバランスをくずしていきます。

いつも自然からのメッセージに関心を持つことが、自然とヒトとの共生の基本です。新しい年を自然と向き合いながら過ごしたいものです。

「知ることは、感じることの半分も重要ではない」、と言った環境問題の先駆者、レイチェル・カーソンの言葉をもとめます。



特集

ぐんま百名山の自然X

下仁田付近の山②

伝説の残る稲含山

高野 賢一

富岡市の南で甘楽町と下仁田町が接するが、その境界線上に稲含山（いなふくみやま）が位置する。三角点のある1370mの稲含山は、群馬百名山にも数えられ、山頂近くにはアセビやアカヤシオなどのツツジ類が多く、信仰の山とともに登山でも親しまれる山である。山容は東西に尾根を連ねた独立峰で、甘楽野からは良く目立ち、この地域の小中学校の校歌にも稲含の名前が使われるほどである。

この山の地質は、埼玉県から群馬県南西部

に延びる秩父中・古生層からなり、チャートという堅い岩でできている。山頂に近づくほど、このチャートが露出していて断崖を造っている。こんな岩山だからこそ、稲含の神が榛名山めがけて、岩を投げつけたという伝説が生まれたのであろう。

稲含山の神は豊宇氣姫命（とようけひめのみこと）という女神、榛名山は男神の須佐之男命（すさののおのみこと）である。この二神は仲が良かったが、ある時、稲含の池と榛名のサルオガセ（高山植物）を交換しようと約束をした。それまで稲含山には稲含七神といわれる七つの池があり、それぞれの池が満々と水をたたえていたが、それらを全て榛名の神にやった。その水でできたのが、今の榛名湖といわれている。そのため、稲含には池がなくなってしまった。

一方、榛名の神は、サルオガセをほんの少ししか稲含の神にやらなかったので、榛名山には、水もサルオガセも豊富にあった。後にこのことを知った稲含の神は、榛名の神が約束を破ったと怒り、稲含の岩を榛名山めがけて投げつけたが、あまりにも大きく重いので、途中の富岡市神成（かんなら）の山に落下してしまった。この神成の山も岩山であるが、最高峰の神成山（321m）を中心に東西に延び

る里山の連山である。ここは秩父中・古生層ではなく、花崗岩で造られた山である。このような伝説が残るのも、稲含山は池がなく、また、チャートの堅い岩が断崖を造るほどの岩山なので、伝説も生まれたのであろう。現在では、小さな池だが公園として神の池が整備されている。また、清水の神の水もあり、中腹から山頂にかけては、鳥居や神社が建立されている。



オオハクチョウ



コハクチョウ



コブハクチョウ



サカツラガン

荒船山と白髪岩

里見 哲夫

下仁田町の山でよく知られているのが荒船山です。高崎方面から眺めますと、荒海に浮かぶ航空母艦のような姿をした山が荒船山です。国道254号を走りますと内山峠の手前に神津牧場入口の標識があります。ここを入り、道を直ぐ左に走るのが旧道で、荒船山入口の駐車場に到着します。コース案内と荒船山の

地質の説明板がありますので読んでから登って下さい。道は整備されていて、迷うことなく登れます。植生の状態や出てくる植物を観察しながら90分位で麓岩（トモイ）に到着できます。標高1200m位のところに大きな岩壁とやや広い休憩場所がありますが、ここまでは火山灰と安山岩が固まった凝灰角礫岩です。ここを過ぎて一杯水の手前に砂岩と泥岩の層が見られます。一杯水付近からは荒船山をつくるガラス質安山岩となります。急坂を登りますと平らな林でミスナラ、オオイタヤメイゲツ、下部にはミヤコザサが一面に見られます。足を進めると先端部のトモ岩に到着します。この岩場はかなりの磁力を帯びています。付近に散らばっている小石を拾って、磁石（方向磁針）に近づけてみて下さい。針の触れが観察できます。石の向を変えて見ますと磁針の触れの違いも分かります。実は、もう一つの謎があります。

1810年（文化7）の著書、「西部私記 安中藩主家臣関島成章著」によると、「山上に湖水あり」と記述されています。さて、何処にあったのか探して見ませんか。また、平原の部分には、今から40～50年前にはコウリンカ、アカバナシモツケソウ、カワラナデシコ、ヤ

ナギラン、アキノキリンソウ等の花が、低木にはレンゲツツジ、ヤマツツジ等も見事でした。今は、ススキや低木が優先し、ミズナラが茂って、レンゲツツジも消えそうになってしまいました。やはり放置した状態となると貴重な植物は次第に消えていつてしまいます。植物の保護とは、人がある程度手を加えて管理していかないと貴重な植物を守ることには出来ません。

白髪岩

下仁田の最高峰で、シラゲイワ、シラヒゲヤマなどと呼んでいます。標高1512mあります。この山に、明治15年の三角点があります。



三角点

ます。10年程前に見つかったものです。この種の三角点は日本に3つ程見つかったているだけで、埼玉県の雲取山、新潟県の米山の三ヶ所で、写真のような形をしています。場所は御荷鉾スーパール林道の、藤岡市と下仁田町の境界付近に数台駐車できる箇所があります。ここには白髪山登山口の小さな標識も出ています。この地点から約40分で行けます。踏み道沿いの枝には赤色のテープがありますので迷わず登れます。途中には下仁田町では珍しいダケカンバの林が見られます。その他ミズナラ、オオイタヤメイゲツ、オオヤマザクラが多く見られます。三角点近くにはチャート

の岩場があつて、その手前にはアセビ、ヤマグルマが多数見られます。岩場にはアカヤシオ、トウゴクミツバツツジ、アブラツツジ、ヤマツツジ、サラサドウダン、コヨウラクツツジ、ホツツジ、コメツツジ、ネジキ、ナツハゼ等が多く見られます。三角点をよく見ますと誤字が見られます。何故こんな字が刻まれたか不思議でなりません。そんな誤りを見つけて見て下さい。現在の三角点は稲倉山、赤久縄山にあります。今年この山で、オオヤマザクラの食害(シカ)を発見しました。写真のようなものです。周辺を調べましたところ、30本位は見られました。食害にあつたオオヤマザクラは完全に枯れてしまいました。今までサクラの食害を見たことはありません。早く対策しないとどんどん広がっていきます。一度登ってみませんか。



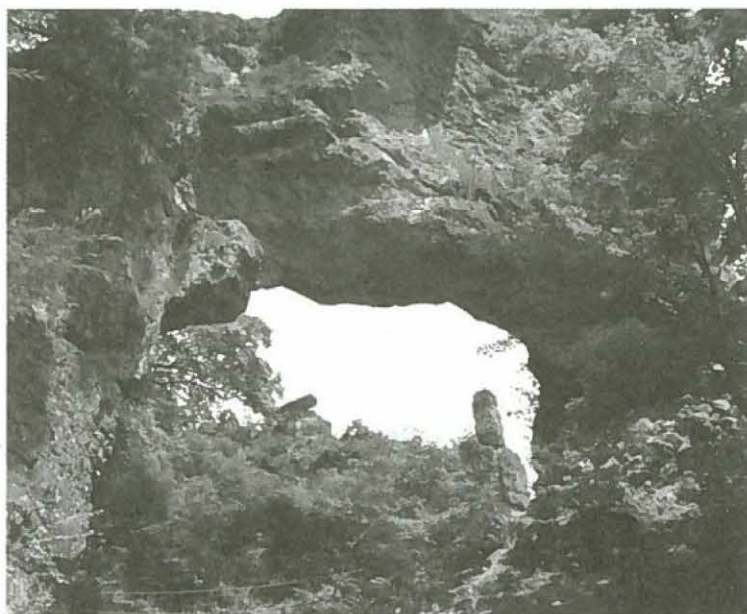
オオヤマザクラ 鹿の食害

妙義山における

子どもたちの自然体験活動

亀井 健一

群馬県民にとって妙義山は、上毛三山の一つとして馴染み深い山であり、とりわけ地元の人にとっては故郷の山である。また、ハイキングや登山を趣味とする人には、長短、難易様々のコースが選べる魅力的な山である。



それでは、子どもたちや学校にとってはどうな山であろうか。この山の山麓には県立妙義青少年自然の家があり、自然体験活動の拠点になっている。妙義山は教育の場にもなっているのである。

ところで、県の事業に「フォレストリースクール」というのがある。学校から要請がある、登録されている講師を、県が学校に派遣する事業である。ある年、この事業により小学校の林間学校で、妙義山登山と自然観察の指導を担当したことがある。その時の様子を記し、妙義山が教育の場としてどのように活用されているのか、その一例を挙げてみたい。私が担当したのはある小学校6年生14名である。妙義少年自然の家を出発し、一本杉とさくらの里を通り、石門コースのかにの横ばいを経由し、第4石門広場まで行き、巻き道を通り、自然の家に戻る自然体験活動である。

学校との事前の打ち合わせで、このプランについて説明を受けたとき、子どもたちが「かにの横ばい」と続く「たてばい」を通れるのか、事故が起きないのか不安がよぎった。当日、出発するとき、子供たちに念をおした。「体調が悪かったりして、かにの横ばいを通るのが不安な人は、巻き道を通るようにしてほしい。

恥ずかしいことではないから手を挙げて」と。1名だけ手が上がり、ほっとしたのである。

かにの横ばいが近づいてくると、何やら騒がしい声がして、渋滞が起きているようだった。横ばいの手前で、幼く見える子どもたちがかたまっていた。聞けば埼玉県からきたという保育園児だった。ゆっくり渡る園児たちで大渋滞が起こっていたのだ。泣きながら鎖にしがみつく子どももいた。鎖を放すなど叫ぶ引率者もいた。はらはらする思いで見ているのだが、ついに全員が渡りきった。

きついと思われる自然体験をさせるのが保育園の方針と聞いたが、園児たちは素晴らしき対応力を持っていた。少々の危険が伴うが、子どもの頃のこのような体験は、人生における大きな力になると思う。幼児の段階で、大人に助けをもらうことができない危機場面に遭遇したのだから。



クコ

次は我々の番だが、子どもたちは難なく渡つたのだが、気が付いてみたら、予定時間が1時間以上遅れてしまい、計画の一部を変更せざるを得なくなった。

さて、6年生ともなれば、思考力は大人の水準にある。私が投げかけた観察課題例を次に幾つか挙げておく。正解を求めたのではなく、考えさせるのが目的であった。

○自然の家の隣を流れる沢は、雨が降っていないのに水が涸れないのはなぜだろうか。

○サンショウの葉をもんで嗅いでみよう。香りの成分は、サンショウにとってどんな役目を持っていると考えられるだろうか。

○ウメモドキの赤い実があった。大きさは直径約5mmぐらいである。実が赤くなり、大きさが小さいのは、わけがあるのだろうか。

○カエデの葉の茎への付き方をよく見てみよう。どんな規則性があるだろうか。

○スギ林を前にして、よく整備されたスギ林でも込み合っているのは、なぜだろうか。

○タケ林を通りながら、タケが密生して生えてくると、他の植物はどうなるだろうか。

○タケは1年で、高さ10mほどと急速に成長するのはなぜだろうか。

○落葉樹の葉は、秋になるとなぜ落葉するの

だろうか。

○妙義山は、なぜあのようにごつごつしているのだろうか。

ざっとこんな質問を出したが、予想もしない応答もあり、子どもの発想の豊かさに、こちらまで楽しくなってしまった。



行事報告

9月16日実施

鈴ヶ岳清掃登山に参加して

五十嵐 京子

鈴ヶ岳は十数年前に主人と一緒に新坂平より鍬柄山を経て登った事がありました。その時、下山途中で道を間違え大分引き返したつらい記憶があり、少し怖い山という印象がありました。

今回も主人と参加する予定でしたが、急遽来られなくなり不安な気持ちで参加しました。しかし登山前の挨拶の折、赤城山の地形を熟知し自然を知りつくしている先生方と一緒に、心にゆとりを持ち参加させて頂きました。

新緑の中で、サワグルミやオニグルミの見分け方やヒトリシズカ、フタリシズカ、ツルニンジン等様々な植物の説明を聞いて行くうちに、このような綺麗な自然を後世に残す為にも、大切にしていきたい気持ちが湧いてきました。そんな思いを感じながら登って行くと、苔むした石に囲まれた炭焼き窯の痕跡が沢山ありました。足元の石も苔で覆われ、とても

神秘的な所でした。更に、大きな岩の隙間にオオルリの巣が有り排除してもまた毎年同じ場所に営巣するとの事。普段望遠鏡でしか見た事のないオオルリが雛に餌を与えている光景をこの眼で見たい衝動にかられました。

指導員の先生からウツギは寄木細工に使う釘に利用されており、打たれる木でウツギと言う名前の由来があるという話を聞きました。樹木と生活が如何に密着しているか納得しました。

又特に印象深い場所は重箱岩やその近辺の巨石群です。どこか遠い地を訪れている気分になりました。汗ばむ肌に心地よい風、少し紅葉が始まり、白い大きな石柱が幾重にも重なり自然が生み出す景観は雄大で見事でした。

また山頂から少し下がった所には、およそ百年前に建立されたと見られるとても大きな一枚岩の石碑があり、幾つもの敷石を基礎とした盤上にそびえ立っていました。どのような手段で設置したのか見当もつかず、昔の人の知恵と偉業に敬服するばかりでした。

この清掃登山に参加させて頂き、赤城山に隠れた名所が数々ある事に驚いています。

今回参加できなかった主人や子供たちにこの感動を肌で感じてもらいたいと思い、今後

の機会に揃って参加したいと考えております。

私は還暦を迎えこれからの人生をどの様に過ごしていこうかと考えていた矢先、こんなにすばらしい山の魅力や自然の美しさを知り感動しています。この清掃登山に出会わなければ、一生味わうことがなかったかもしれない。この感動を得られたのも、山のルールを理解し自然を大切にして来られた皆様方のおかげだと思えます。ありがとうございました。

赤城キャンプ場より鈴ヶ岳

里見 哲夫

赤城キャンプ場より鈴ヶ岳への清掃登山に参加する。出発地点よりの道々の両側にはケアブラチャンが列をなしたように生えている。すでに来春への花の蕾がみられた。所々にケキブシ、ニワトコ、クマイチゴ、モミジイチゴ、ニガイチゴ、ノイバラ、ナワシロイチゴ、エビガライチゴなどがある。右側の下部にはイヌガンソク、ハクモウイノデなどが多く、左側にはヒメシダが多い。しばらく進んだ橋の付近にはフサザクラ、サワグルミ、オニグルミなどが目立ち、溪流沿いの植物や単葉、

複葉について説明をする。登山道入口(南回り)付近からの周辺一帯はスギやカラマツの植林地で下部にはオシダの群生が見られた。またクリ、コナラの二次林もよく生育し管理が行き届いていた。間伐された林下にはオオバアサガラが目立った。その昔使用したと思われる炭窯が幾つも見られた。林下にはクサタチバナとコブシの幼樹が多数見られた。途中の大きな岩穴にオオルリの巣があり、関さんから説明を受ける。

最後の水場といわれる清滝不動石碑で休憩、ここからはいよいよ登り道になる。一帯はクリーコナラ林で、目通り直径30cm余のクリ、コナラが多数見られた。中には目通り1.2mもあるクリの太木があった。今このような立派な林はなかなか見られない。清滝不動より登り約35分で、北回りとなるとの分岐点に着。南回り側にはミズナラ林、北側はダケカンバ林の見事な林が見られた。

分岐点より道を鈴ヶ岳山頂の南面岩壁下に沿って登る。南面の岩壁は山頂より柱状節理となり十数mの岩場を形成している。ここにはオオバギボウシが岩の間に列をなしてついていた。ハコネギク、クリヤマハハコ、コキンレイカ、イワイヌワラビ、イワタケなどが

10月21日実施

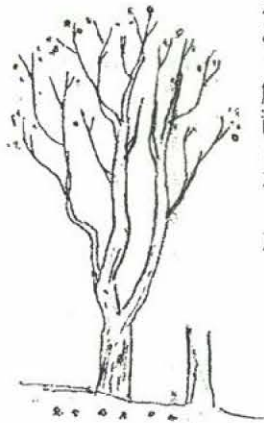
自然観察会「ワラビ平・高倉山」

佐塚 直美

みられたが、赤城山でのイワタケの分布は珍しい。少々岩場を眺めていたが先頭の人達に遅れまいと、丁寧な観察が出来なかったのは何としても残念に思っている。下部一帯に広がるスズタケはシカの食害にあつて20cm位の高さとなっていた。

岩場を直登することが出来ないため右に巻くようにして、崖の岩が四角に切り抜かれた形をした重箱岩の所に出る。ここより山頂へと足を運ぶが、急坂の岩場一帯にはミズナラ、リョウブやシロヤシオが多くジゾウカンバが所々に見られた。山頂部にはコメツツジ、ヤマツツジ、コヨウラクツツジ、ホツツジ、アブラツツジ、ネジキなどの低木が、その下部にママコナがあつた。山頂北のミズナラ林の下で昼食、小雨に見舞われたが間もなく止んだので急いで帰路につく。

予定の時刻には無事を確認し、清掃登山で拾ったゴミも少なく、神宮氏より参加者に感謝の挨拶があり解散となった。



モミジハフウ

パンフレット「山と森の月間」に誘われて伊勢崎市東の外れの自宅を出てから約2時間、漸く集合場所のワラビ平駐車場に到着、集合時刻にやっと間に合ったと安堵して受付して貰っていると、どこから聞き覚えのある声がか聞こえ担当指導員の吉田さんの声と分かる。そういえばもう10年も前に自然保護連盟の自然観察会で、玉原や赤城や寝釈迦等に連れて行って貰ったことを思い出す。指導員の方々の自己紹介を聞いていると、寝釈迦で動物について説明して貰った関さんが居られるし、先週も赤久縄山でお世話になった里見先生や神宮さんも居られる。参加者の申し込みはもう少し多かったようだが、あいにくの？秋の行楽日和のために大分減り、一般参加者は小学生から我々のような初老の物まで幅広いものの10名程度、それに対してほぼ同数の指導員とスタッフの居る、いわばマンツーマンの極めて贅沢な自然観察会となった。

植物の名前や木々の葉の形や色の変化につ

いて、吉田さんや里見先生から道々事細かに教えて頂きながら、山腹のワラビ平から山頂の高倉山まで山道をゆつくりと登り、山々の遠景や木々の近景ばかりでなく、黄葉や紅葉や褐葉した木々の葉の彩を日の光を透かして観察して秋のモミジを満喫した。当日はまさに天気快晴、高倉山の山頂からは浅間隠山・鼻曲山・角落山から榛名山まで高崎の山々を一望、更に赤城山や御荷鉾山も幽かに遠望された。ワラビ平森林公園の近くには高倉山コースの他にも、二度上峠まで足を延ばして、一般向け人気の浅間隠山コース、比較的歩きやすい鼻曲山コース、また足場の悪いところがあり要注意の角落山コースもあるという。そういえば以前二度上峠から鼻曲山に連れて行って貰った事を思い出した。既にそのときも相当きつかったので、10年経って体力が衰え体重の増えたいまでは鼻曲山もちよつと無理かなと思う。高倉山コースも下りは相当きつい。

鼻曲山から下りた際は、はまゆう山荘で汗を流した事を思い出し、はまゆう山荘に1人で立ち寄ってみる。以前は温泉でなかったはまゆう山荘も、今は三種混合の湯なる天然の倉淵温泉となっている。今回の高倉山登山ではさほど汗をかかなかったものの、温泉にゆつ

たり浸かり肌着を換えてサッパリすれば気分爽快。秋の一日を散策した疲れを癒して家路についた。ご多聞に漏れず成人病となり、医師より健康管理にウォーキングを奨められているものの、一人ではなかなか実行できない。最近ではウォーキングブームではあるが、家の近くの同じ場所を定期的に歩くのは退屈だし、ただひたすら早く長く遠くまで歩くウォーキングは、私にとって無理ではと考えている。これを機会に再度自然観察会に参加し、指導員の皆さんに有益なお話を聞かせて頂きつつ、仲間の皆に引張ってもらってゆつくりと楽しく歩けるウォーキングをできたらと期待している。

植物歳時記 (60)

アオキ (青木)

吉田 龍司

かくれんぼ息ひそめいる青木の実 龍司

アオキは日本原産でミズキ科アオキ属の常緑低木で、庭木などごく身近なところにあるので知らない人はいない植物といえよう。

自生地は宮城県以南の本州、四国、九州、

沖縄の樹林下に広く分布し、雌雄異株の常緑低木であることは案外知られていない。高さは2〜3mで株立ちとなり、葉は対生で長さ8〜20cmの長楕円形。濃淡緑色で艶があり葉質は厚く縁には粗い鋸歯がある。3〜4月ごろ枝先に円錐花序をつけ、紫褐色の小さい4花弁の花が開く。花序のついた枝はその後二股に分岐し、つかない枝はそのまま1本で伸長する。雌株につける花数が少ないのは、果実のコストが余計にかかるからで、花芽の数は雌株、雄株とも同数。しかし雌株は花芽をつけても、その花芽を中絶することで雌株の花数を少なくしているのだという。

ルーペで観察すると雄花には雄蕊4本で雌蕊はなく、雌花には雌蕊1本で雄蕊はない。果実は雌株に付き、楕円形で長さ1.5〜2cm。



核果は初冬、鮮紅色に色づき翌年の春まで付いている。果実は赤く美しいので葉の青さと相まって観賞用として好まれる。私の観察不足かも知れないが、実が大きく過ぎるのかヒヨドリ以外の野鳥が採餌しているのをあまり見かけない。アオキは耐陰性、耐寒性に優れ、栽培しやすいので広く庭に植えられた。目隠し、風除け、庭木の添木などに利用されてきた古典的な植物といえよう。

学名はアウクバ・ヤポニカ。属名アウクバは日本の青木葉(アオキバ)の名に由来し、スエーデンの医者であり植物学者のツンベルク(1743〜1828)の命名である。彼は1775年に来日し、命名したのは天明3年(1784)のことである。学名命名の前年に英国人グレイファーが雌株の葉に黄色の斑入りのものをヨーロッパに送り観葉植物として各地に広めたというが、雌株だけ送ったので実はならなかった。記録によると77年後の1860年にプラント・ハンターのロバート・フオーチューンが、英国園芸協会の依頼で横浜から再び雌株をヨーロッパに送った。到着して3年後受粉に成功して、赤い実が枝先いっぱい付き、アオキの人氣は高まったという。最初の雌株が到着してなんと80年後のことであ

あった。このことはわが国に移入されたキンモクセイやギンモクセイにも言えることで、雄株だけだったため、今もって普通には日本では実を見ないのと対照的である。

学名のアオクバは葉も茎も常に緑色であることからこの名が生まれたことは充分理解できる。茎はコルク形成する組織が数年間も発達しないため、普通の樹木のような褐色の樹皮は出来ないという。日本の庭園樹として普通に見られることは既に述べたが、公害にも強い樹種の一つとしても知られている。もっともDNA情報を基にした新しい分類体系ではガリア科またはアオキ科とされるようであるが、私には未だ理解し難い分類である。

アオキによく似るヒメアオキは、日本海側のブナ帯（ブナ・チシマザサ群落）の林床に普通に生育する指標植物である。地表植物は環境に適合して生育するため、地表植物を調べるにより環境を判断することが出来るのでその植物のことを指標植物と呼ぶ。

アオキとの違いは日本海側の多雪地帯に分布するのと、丈が低く葉が小型であり、葉柄や葉の下面や芽、枝などに微毛が生ずるのが大きな特徴であるが区別は難しい。

アオキの葉は民間薬として古くから利用されてきた。腕白であった私は、子供のころから生傷に絶え間がなく、母親は火傷や、切り傷、腫れ物が出来ると、アオキの葉を長火鉢の熾火で炙つてよく患部に貼ってくれた。「効いたか否か」は定かではないが、膏薬代わりであったことは覚えていて。吉野洞川の「陀羅尼助」は、木曾の「百草丸」と並んで黄檗（キハダ）を基とした有名な胃腸薬だが、これにもアオキは使われている。薬効というよりむしろ、エキスの艶出しに使用されたようである。また葉っぱは牛馬の飼料としても使われたと文献に載っている。

アオキの方言は『日本植物方言集成』（2001）には67収録されている。アオキ、アオギ、アオキツバ、アオキバ、アオニヨロなど青木をイメージした方言が殆んどである。

面白いことに味噌の醸造殺菌に使用されたのかミソキバ（愛知）、ミソツバ（静岡）、ミソブタ（埼玉）がある。毒をイメージしたのかドクポンポ（福井）、ドクミソ、ドスツバキ（新潟）などもある。獣をイメージしたものは、キツネツバキ（新潟）、クマツバキ（長野）、

サルノチンポ（千葉）などがあり、東北から四国、九州に至るまで方言は収集されている。しかし残念なことに群馬県の方言は収録されていないのは淋しい限りである。

・雪降りし日も幾度よ青木の実 中村 汀女
・掃きつめし雪なだらかに青木の実 佐久間法師
花は春だが実は冬に目立つところから、冬の季語としている歳時記もある。

・花言葉 若く美しく、永遠の愛
・誕生花 10月22日。

図鑑の内と外

植物私記③ ツルヨシ

佐鳥 英雄

私は政治評論家ではありません。その方面の勉強はしていませんので、そう自覚しています。けれども私は、「この憲法が保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」という、第12条を信頼している一人なので、「不断の努力」として、思うことを発言してなければならぬとも自覚しています。そこで、折にふれて、

政治に容喙するのです。

ところで、ご承知のようにことばというものはフシギで、多義語というのが沢山あります。例えばもみじ。私も何度か質問されているのですが、これは、たとえば〈広辞苑〉を引けばすぐ分かります。

① 秋に、木の葉が赤や黄色に色づくこと。

② カエデの別称。

つまり、もみじは秋に草木が色づくこと。

(草もみじ・イチヨウのもみじ) 以外に、カエデ科の木々という意味もあって、(この木はもみじです) などとも言ってます。以上は多少失礼か…と感じながら述べました。失礼ついでに記しますと英語の wind もそうです。

① 風 ② あおり風…などと辞書にはあって、

③ Politicians promises are all wind. などの例文があります。からんぼ・ウソなどの意味です。(statesman ではなくて politician であることにご注意ください)

私も多くのの人々と同じく、TVや新聞などを通して(つまりみんな間接的に)多くの政治家のことばを日々受けとめ、多くの感想を持つのですが、それを一言で言えば、〈あきれかえる〉としか言いようのない状況です。何よ

りいやなのは、「そうは言っていない」とか「誤解された」とかいう言い訳。(世の中に誤解・曲解はよくあると私も重々承知してはいますけど)

それと、独断と偏見を臆面もなく披瀝してくださいる御方々。

昔を偲べば、ベトナム戦争の時、中国政府はオゴソカニ宣言していた…と、私は記憶するのですが、周恩来さんだったかの次のようなことば。

「ベトナム人民は中国人民の永遠に変わらぬ兄弟であり…」

それが代替りしたとはいえ、小さな島をめぐって、「断乎」として、譲ることができない…と叫んでいます。

私はロシアが占領している北方四島・朝鮮の竹島(独島)・尖閣諸島、みんな日本領と考えておりますが、戦争してもよいという気持ちはありません。日本は戦争しない国ですし、これを、やれ「弱腰だ」「意気地なしだ」と吠え立てる人々は、日本を、ふつうの国、つまり戦争できる国にしたいとおっしゃいます。こういう人、意気盛んで勇ましいなあ…。でも、どの国もみんなこうだと、やつぱり戦争です。こういう人々は、「どこかの無人島を提

供してあげて、存分ドンパチやらせたら…」と、私はいつも思うのです。丸山健二さんが言うように、世の中には戦争大好き人間がいるので、こんな下品な感想も湧くのですが、下品といえば、戦争も下品な人間の行動です。むのたけじさんは、バカたれ…と呼びます。兼好は、「人倫に遠く、禽獸に近き振舞」と言いました。渡辺一夫さんは、「征けといえは征く。でも、私は人を殺さない」とおっしゃったそうです。こういう人々を上品な人と私は言います。ついでに申しますと、世にいう愛国心なるものを私はとくに持つておりません。たとえば、オリンピック。私はその妙技を愛します。妙技とそための努力と工夫を称えます。でも、どの国が金メダル何個とかに関心はありません。こどもの日に、「白地に赤く日の丸染めて ああ美しい 日本の旗は」と覚えましたが、青年になって気がつく、どこの国の旗もみんな美しかったことでした。ついでに言いますと、「ニホンと読んではいけません。ニッポンと読むのです」は国民学校(小学校)三年頃の修身か何かの本にあった一文で、はつきりと覚えています。その頃のニホンは「大」の字が大好きでした。大日本帝国・大東亜戦争。さすがに〈富士は世界一の

山」はなかったですけれど。その大東亜戦争は百年つづくんだ……と聞いておりました。「さてな。カミサマの国でも百年勝てないとはフシギ……」と思っていました。先生には質問しませんでした。ブットバサレル……と思ったからではありません。私は国民学校三年で戦争が始まり、中一で終わるのですが、国民学校の先生で子供をブットバス先生は一人もいませんでした。中一で逆転して、ものすごい先生の暴力。「級長出てこい」に震え上がっていたものです。なお、念のために書き加えますと、私は愛国心はどうでもよいほど小さいのですが、愛球心（球は地球）は人後に落ちないくらい持っています。そのためのささやかな努力をしています。（地球の一国？）笑わせるな……とおっしゃるかたもおいででしょう。でも、少し長い目で見てごらん下さい。人類は少しずつそういう方向に進んでいますし、そうする以外に生き延びられなくなっているでしょう。自然破壊・人口問題・食料危機（その量と質の）・戦争の危険・資源浪費……どれをとっても、（わが国益）などと、おくれた政治家の口まねをしている段階ではなくっていませんか。

結局領土問題は、話し合いよりありませんが、ダメなら

① 国際司法裁判所で争うのがよいでしょう

② それがダメなら共同管理。

③ ダメなら放置。

（もったいない）……？。バカを言うでないです。今の人類が地球の資源を全部使つてよいなどと、どこの誰が言ったでしょう。

いずれにしても、「断乎」と「絶対」はやめましょう。断乎列車も絶対列車も終着駅は戦争です。

評論家もどきの文章は以上です。ツルヨシの話に移りますが、賢明な諸子は、以上と多少の関連があることをご理解くださるだろう……と考えます。

はじめに、ツルヨシはツルアシと呼ばないことを小考しましょう。

少し昔、私達の日本国は、豊葦原千五百秋の瑞穂の国などと自称していました。まあ、一種の自賛ですが、そのこと自体に罪はありません。私がいつも思うことの1つは、このことば、豊葦原・千五百秋・瑞穂など、いったいいつ誰が言い出したのだろうということ。これらのことばがどんな記録（主として書籍）に初めて登場するのか……ということを知りたいのです。名づけて、『初出辞典』と

でも言うべき辞書、それがなぜこの世にないのでしょうか。ですから、ツルヨシもいつ生まれたか、さっぱり分からないのですが、アシと呼ばれることから、ずっとあと、江戸時代の中ぐらいなのでしょうか。アシの変りものくらいでずっと来ていたのでしょうか。

ところで、アシは「世界で最も分布の広い植物の1」（広辞苑）ということ、私もイタリア・ドイツでよく見ました。スイスでの記憶はつきりしません。もちろん、あるのだと思います。それに比べてツルヨシは、（日本の野生植物）によれば、「本州・九州・琉球（沖縄）の川岸、砂質地に多く生え朝鮮・中国・ウスリーに分布する」といいますので、アシの勢力と比べものになりません。あるいは、ツルヨシはアシから派生して、世界展開を考慮中の植物でしょうか。

私はここ数年、このツルヨシのつるに注目して観察をつづけてきたのですが、そのため渡良瀬川に何百回となく通ってきました。つまり川立ちです。（木登り川立ちバカがする）という諺がありますが、文字どおりその実践です。でも大丈夫。私は60代ごろから、手作りの頑丈な杖を突いているのです。ほんとうはより安定を増す両手杖でやりたいのですが、

そうすると観察力が低下するので、それはまだやっていません。閑話休題。

ツルヨシの地下茎はアシのように潜ることをやめ、自由な空が待っている地上に出てしまいました。さて、どうなるか。その効果はテキメンで、どんどん勢力を拡大してゆきます。アシの苦手な砂利場でも玉石群落でもなんのその。ストロンを伸ばして次々と新株を作ってゆきます。その長さ、時に10m。30cm間隔で新株を作るとすれば、1本でざっと30株。100坪くらいの更地は2年くらいで埋めつくしてゆきます。その実力で、ツルヨシはアシが進入できない溪谷にも入り込んでいます。桐生市で言いますと、梅田町の野外活動センターくらいまで入るのがアシの限界で、その奥は（上流は）ツルヨシの世界です。逆に河口付近ではどうなのでしょう。へ枯れた真菰に照らして潮来出島のお月さんで、マコモの在り処はほぼ推定できるのですが、ツルヨシは歌詞にしてみらえないので分かりません。行ってみれば済むことなのに、まだ行っていません。

さてさてさて、このツルヨシのつるの仕組みですが、どこで学習したのか大変賢くて、新株は一節置きに作ります。作らない節は苗

を1本、真上に立てるだけで、秋とともに枯れてゆきます。節1つおきくらいで苗（株）を作ると、ちょうど玉石と玉石の間に株がおさまる、というか、育つことができるのを見越しているようです。ですから玉石が大きすぎると変調となり、苗（株）を作ろうとする努力が根の素を瘤状にしてゆきます。ですからつるの伸びたところが、たまたまコンクリートだったりしますと、1つも新株となることができないで、根は瘤となった状態で終わります。更に観察をつづけますと、時々、新株が1つおきではなく、節ごとに生まれている場合が出て来ます。原因はよく分かりませんが、節がみんな地面に接している場合にしか起こりませんが、砂場ならみんなそうなる訳では



ヘクソカスラ

ありません。そこはかなり気まぐれ：のように見えます。

さてさてさて、もしもつるが水面に伸びて行ったらどうでしょうか。節から出た根は（この場合は節全部が根を出す）、根は水中に浮いているよりありません。地中に入った根と比べて、沢山のひげ根を伴っているのが特徴で、水から栄養を撮って、先を急ぐでしょう。

さて、（さてが多くて恐縮です）、今年できた新株に夏の終り花は咲くでしょうか。ほとんどが新株で終わりますが、稀にはもう花穂を立てるものも出てきます。そして、最後になります。春、株から立ち上がった茎のうち、どれが匍匐茎となつてゆくのか：と思つてみるのですが、走り出す前に判別することは、なかなかむづかしい：状況です。

（付記①）領土問題はそれなりの関心で、新聞の解説・本屋の店頭での多少の調査など、私なりの努力はしていますが、十分ではありません。また、この種の問題の勉強で十分ということはなかなかないようにも思われます。

② 匍匐茎となるものは、少し掘ってみますと、脇から多くの直立茎を立てていますので、脇役ではなく主役のように見えます。つまり、

春、最初に伸びてくる茎が匍匐茎となつてゆく……と、想定されるのですが、そこは観察してきませんでしたから、私の宿題です。③もみじの多義性についてですが、《広辞苑》・《日本語大辞典》が、②カエデの別称とか通称としているのに対して、《大辞林》が、②イロハモミジおよびその近縁のカエデ類の別名。……として、「やや限定的な範囲のカエデの仲間」としています。

群馬の地質

原発マネーを断わる

飯島 静男

君、^{さか}四万でアルバイトがあるよ、と先生が仰った。新治村境の稜線に百万ボルト（実は五〇万）高圧送電線を通すにあたり、鉄塔の基礎地盤調査をする。地質調査の人足が要るのだと。

卒業研究のテーマは四万温泉一帯に分布する大貫入岩体の、外形を明らかにすることであったが、深成岩・半深成岩の複合岩体とされていた四万岩体は存在しない。そこには堆積岩が分布するとの結論を得て、ぶらぶらしていた時である。卒研の続きで山に入り、労

賃が稼げれば一石二鳥。しかし企業絡まりで得たデータは許可なくして発表できない。それでばくは断つてしまった。（ヤマヒルが恐くてとの噂もあったが）

新潟で発電し、東京へ送る。それには巨大な鉄塔を並べ建てる。規模の大きさに驚いた覚えがある。図らずも原発マネーのお零れに与り損ねたが、別に誉めた話ではない。政治・経済的背景には無知であった。

何年か後、四万に宿泊せず、日帰りで調査に通った。温泉の西側にコールドロン（火山性陥没構造、カルデラ地形は現存しない）があるらしい。それが温泉の湧出に関係している。地質図は群馬県温泉協会の報告書に載せてもらった。四万は深山である。晩秋のみの日帰り調査では、流域全部は踏査しきれない。いつまでも有ると思うな親と金。

植物をミクロで見る（8）

イヌホタルイ

青木 雅夫

水田に生えるイヌホタルイというものがあります。根から立ち上がった茎（稈）と長い苞の間に出るいくつかの小穂、よく似た植物

は多いのですが、このような植物を調べるには、瘦果を調べなければなりません。瘦果には雌しべの柱頭、そして雄しべの花糸と双子葉植物の花弁に当たる針状花被片があります。その形態に魅力があります。

この植物は水田の雑草として農家の人にはやっかいものでよく知られております。柱頭の先が2つあるいは3つに分かれています。針状花被片は瘦果の大きさを超えない長さがあり、上に向かつてざらつきます。2mm位の小さな瘦果は私の撮る写真の限界です。



残された自然の中で (159)

チメドリ科外来種の生息状況

谷畑 藤男

群馬県内には、輸入飼育個体の籠脱けまたは意図的な放鳥が原因と思われるチメドリ科4種（カオジロガビチョウ・ガビチョウ・カオグロガビチョウ・ソウシチョウ）が外来種として生息している。籠脱けしたペットが一時的に野生化することはあるが、捕食や冬を越せず絶えてしまうことが一般的である。ところがカオグロガビチョウを除くチメドリ科3種は、特定の地域に定着しただけでなく、群馬県内で分布を拡大している。

2005年におけるチメドリ科4種の県内生息状況は図1のとおりである。（2006 深井）カオジロガビチョウは赤城山を中心に、ガビチョウは群馬県南部（西毛地域）に生息している。そして利根川が2種の分布の境界になっているように見える。チメドリ科が好む数環境は河原・休耕地・林縁等にいくつらでもある。競合する鳥類が少なく、雑食なので分布拡大は続くと思われる。

2010年、チメドリ科外来種の現状と分

布の変化を知るために、3年間の予定で調査を行った。調査方法や調査協力者から送られてきた情報は「チメドリ通信」として過去9回速報した。2010年から2012年の調査結果であるチメドリ科3種の分布は図2のとおりであった。また全国の分布図は外来種ハンドブック（2012 川上・叶内）より引用させていただいた。

1994年、カオジロガビチョウは赤城山の南面で確認された。現在も赤城山が生息の中心であるが、西および北方にやや分布を拡大した。高崎市寺尾町の烏川付近では、ガビチョウを含むカオジロガビチョウの小群を観察した。本種は鳴き交わしながら数羽から十数羽の群れで行動する。留鳥として平地から標高800mまで分布する。

1999年、藤岡市庚申山で生息が確

認されて以来、急速に分布を広げている。北部と東部の一部を除くと県内で生息が確認された。河原や里山の藪で一年中、大声で囀る声を聞く。留鳥として平地から標高1000mの山地まで分布する。

ソウシチョウは江戸時代から輸入されており、1990年代から野生の個体群が確認されている。しかし山地自然林の林床笹が繁殖地のため、群馬では前2種ほど話題にはならず、実態もよくわからなかった。しかし3

図1：ガビチョウ等の生息状況（2006年）

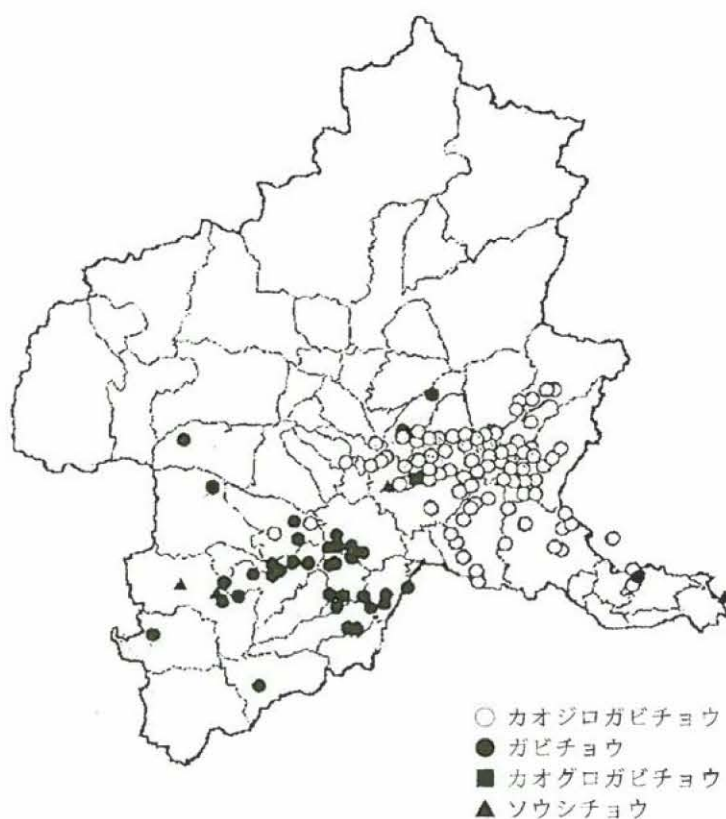
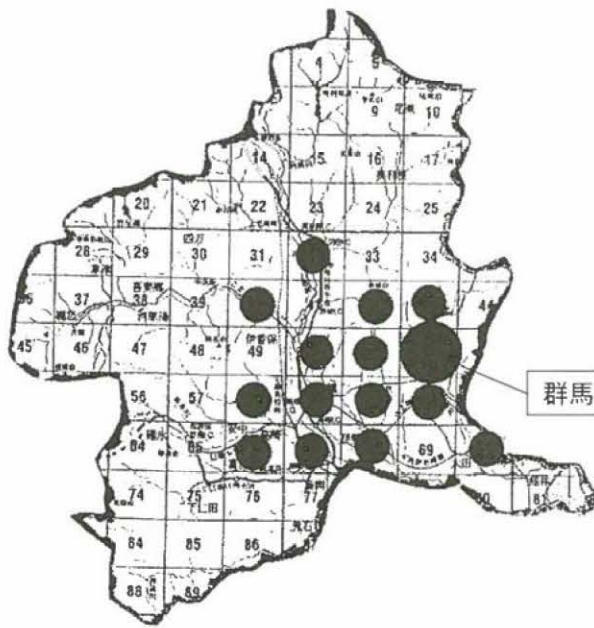
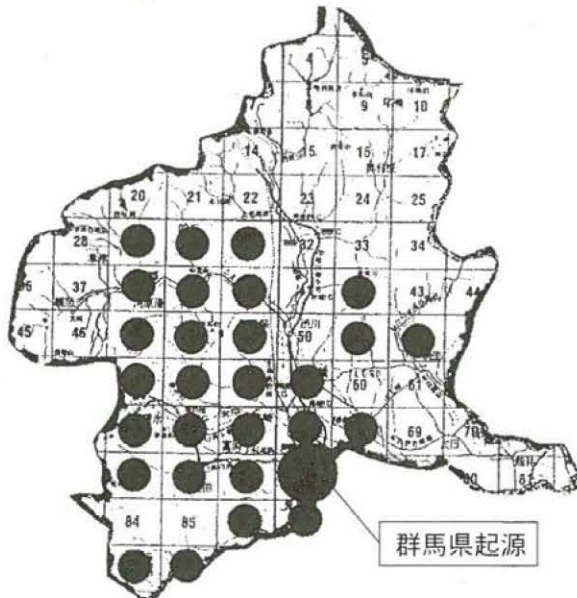


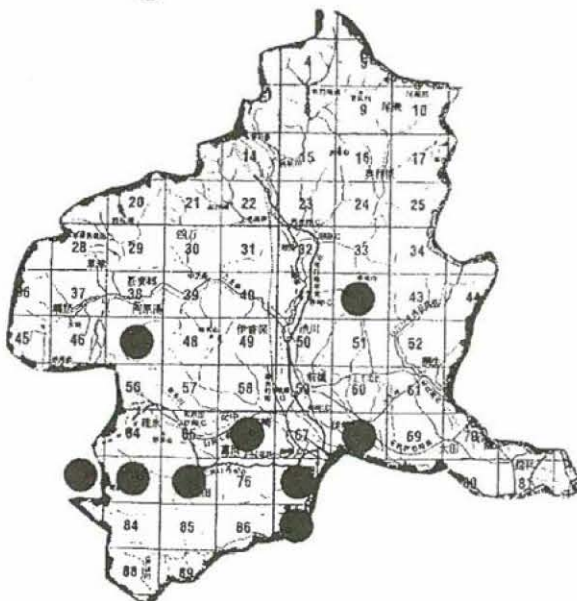
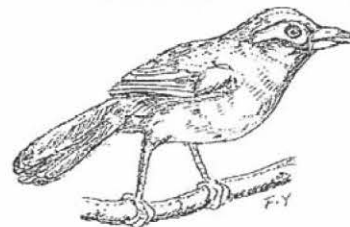
図2：チメドリ科外来種の生息状況（2010～2012年）



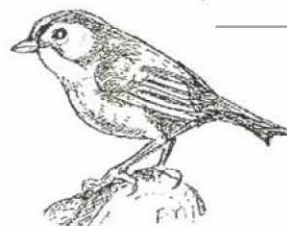
カオジロガビチョウ
学名 *Garrulax sannio*



ガビチョウ 画眉鳥、
学名 *Garrulax canorus*



ソウシチョウ 相思鳥
学名 *Leiothrix lutea*



年間の調査で荒船山・角落山・赤城山の標高1100～1300mの林が繁殖地であり、観音山・庚申山などの里山そして利根川・鍬川などの河原の笹藪が越冬地であることがわかった。

カオグロガビチョウは2012年4月、伊勢崎市の利根川五料橋下流で記録された。本種の記録はもとも少なかつたので、分布の増減は不明である。

3年間の調査でカオジロガビチョウ及びガビチョウの分布が拡大したことがわかり、ソウシチョウの分布の一部が解明された。今後は各種の生態や行動について観察したい。

3年間、たくさんの方に協力していただきました。少人数の調査では、県内各地で爆発的に拡散していく外来種の動向を捉えることはできません。また分布図作成の資料として、野鳥の会群馬の会報「野の鳥」の「鳥だより」を引用しました。情報を送っていただいた調査協力者及び「鳥だより」報告者のお名前を記して感謝の意を表します。

調査協力者（敬称略）

大澤和子・谷山孝雄・谷山久子・石見哲朗・加代信竹・中澤和則・小林俊夫（野の鳥299）・

寺内 浩・水野博晶・黒澤晴男・田中征雄・飯塚博文・高橋駿介・大塚高明（野の鳥311）・大内敏子（野の鳥312）・富岡六郎（野の鳥297）・坂本俊英（野の鳥297）・福田修三・瀧川不士男・大阿久悠一

参考文献

2012 川上和人・叶内拓哉

2006 深井宣男 野の鳥278号

外来種ハンドブック



庚申山のソウシチョウ（福田）

編集からのお願い

明けておめでとうございます。今年も「群馬の自然」発行にご協力お願いします。

今年の干支に合わせ表紙イラストは「ヤマカガシ」、裏表紙には準絶滅危惧種「シロマダラ」の写真。ヘビが苦手という人もいますが、爬虫類は鳥類と哺乳類の先祖です。

本号より目次の上段に、三井田進さんの季節感あふれる自然写真を掲載します。お楽しみ下さい。また好評の表紙イラストには、要望によりモデルについて簡単な説明を添えたいと思います。

次号は広大な湿地でラムサール条約登録地でもある「渡良瀬遊水地」を特集します。また夏号には「ぐんま百名山の自然 日光付近の山々」を予定しています。対象は四郎岳・温泉ヶ岳・金精山・日光白根山・錫ヶ岳・皇海山の六山です。原稿の締め切りは2月28日です。自然保護に関するご意見や観察記録をお待ちしています。事務所宛にお送り下さい。よろしくお願いいたします。



モミジバフウの実

表紙の説明

ヤマカガシ（山棟蛇）

ナミヘビ科ヤマカガシ属のヘビ。日本では最も生息密度が高く、各地の水田や水辺などの湿地に生息し普通に見られる。全長60～100cm。体の前半部は赤色を帯びるが、体色・斑紋には変異が多く、若い固体では

頸部の黄帯が目立つ。

無毒ヘビと異なり上顎後方には、前方の歯

エル、小鳥などである。

列と少し間隔を置いて1、2本の他より大きい歯があり、基部に耳腺の一種である出血毒を含むデュベルノイ腺が開いているので、奥歯で咬まれると危険である。

秋に交尾し、翌年の初夏に8～20個産卵する。餌は他のヘビが嫌うヒキガエルを含む力



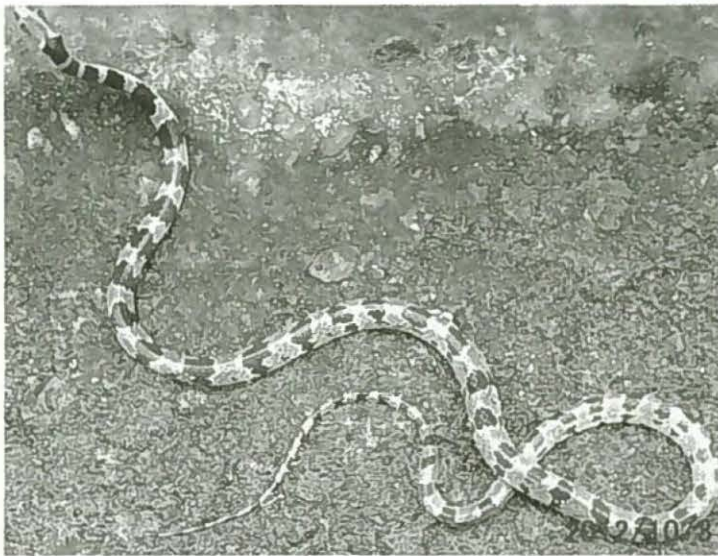
ロウバイ

事務局日誌（167）

9月22日	シニアと児童の赤城体験指導	10月25日	第14回ぐんま環境フェスティバル出展説明会
9月23日	同右	10月26日	赤城山覚満淵笹刈り作戦・現地打合せ下見
9月28日	赤城山の自然保護活動推進協議会	11月3日	県自然環境課次年度行事下打合せ
9月29日	赤城山鍋割高原、鍋割山清掃登山 19名参加	11月4日	伊香保森林公園オンマ谷自然観察会 27名参加
10月2日	明寿大学植物観察指導	11月8日	第4回赤城山覚満淵ササ刈り作戦 121名参加
10月3日	覚満淵ゴミ処理対策4者会談	11月9日	県環境賞顕彰式須田けい氏受賞
10月6日	10月理事会 13名出席	11月10日	県自然環境課「受託報告書・請求書」持参
10月9日	10月理事会議事録郵送	11月13日	勢農高校シンポジウム打合せ
10月11日	ワラビ平～高倉山自然観察会下見	11月13日	県林政課「山と森の月間」審議会
10月13日	赤城山環境ガイド等養成講座step II	11月21日	県林政課「山と森の月間」報告書送付
10月16日	会報「群馬の自然秋号」郵送	11月29日	渋川林業事務所「林道赤城白樺腺」報告
10月17日	県自然環境課「清掃登山報告書」持参	11月30日	忘年・祝賀会 20名参加
	第32回赤城自然塾運営会議	12月7日	赤城自然塾（小林善紀氏）祝賀会
10月21日	ワラビ平～高倉山自然観察会 19名参加	12月8日	12月理事会 13名出席
10月22日	赤城山覚満淵笹刈り作戦事前会議	12月13日	12月理事会議事録郵送
		12月18日	県自然環境課「委託業務」打合せ来所

シロマダラ (白斑)

ナミヘビ科マダラヘビ属に分類される日本固有種。夜行性で目撃数が少なく見つかることは難しいことから「幻の蛇」と呼ばれる。全長35〜70cm。体色は淡褐色で黒い横縞が入る。上顎の歯列に左右それぞれ2箇所の欠損部があり、学名の属名は「歯が2つ無い」の意味。森林の林床付近に住み、毒はなく口が小さいので噛み付かれることは稀。動物食でカナヘビやトカゲ、タカチホヘビ等を食べる。(参考文献 爬虫類・両生類800図鑑第3版)



吾妻川サイクリングロード(渋川市金井)の側溝内で捕獲撮影。関敏雄氏

事務局だより

・11月4日「第4回赤城山覚満淵笹刈作戦」は121名の方の協力により無事作業を終了いたしました。来春には多くの草花が甦ることでしょう。皆様のご協力に感謝いたします。

・11月8日「群馬県環境賞(平成24年度)」に須田けい理事が受賞されました。

・12月4日「第20回石川薫記念地域文化賞(群馬地域文化振興会)」に里見哲夫氏が受賞されました。両氏とも永年に亘る調査研究並びに自然保護の啓発活動が評価されたものであり敬意を表します。おめでとうございます。

・森林整備に「緑の県民税」の名称決定

県は荒廃の進む森林保全のため、2014年度に森林環境税導入に向け名称を決定した。来年2月の県議会定例会に条例案を提出する。

新会員紹介(敬称略)

藤原 直人(上田)

寄付金

今井善之輔様

金 3,000円

冬芽と葉痕



アオハダ



アオダモ



オオバクロモジ

群馬の自然 167号

発行日 平成25年1月
 発行人 NPO群馬県自然保護連盟
 編集人 谷畑 藤男
 発行所 群馬県自然保護連盟事務所
 〒370-0046
 高崎市江木町610-10
 電話 027-324-5706
 携帯 090-4833-5789
 振替 00320-6-13239
 会費 2,000円(年間)

寄贈図書

鳴 神 塾・「桐生市とその付近の帰化植物」
 日本野鳥の会群馬・「野の鳥第314号」
 群馬 県・「市町村別鳥類生息密度調査報告」
 群馬 県・「群馬県の絶滅のおそれある野生生物・動物編 2012年改訂版」
 今井善之輔様・「長野県植物誌」

・報告会のご案内・・・ご参加下さい
 「ぐんまの自然の『いま』」を伝える報告会
 講演 環境カウンセラー 臂 泰雄氏
 発表 自然環境調査・保護保全、7報告
 開催日 平成25年2月9日(土) 13時〜17時
 会場 県立自然史博物館・学習室
 配布 要旨集、鳥獣統計資料等配布